

若手教員と語る学校のリアル

佐久間 大氣（千葉明德中学・高等学校）
窪田 貴和子（千葉県立船橋高等学校）
高野 晃多（佼成学園女子中学高等学校）
山下 達也（明治大学文学部）

はじめに

本分科会は、明治大学教職課程常設分科会として設定された分科会であり、今年で5回目の開催となった。

毎年、教員歴1～3年程度の若手教員にお越しいただき、教員生活の生々しい話を聞くことができるということで、毎年多くの学生の参加が見られるのも特徴である。

今年度も例年同様3名の若手教員の方にお越しいただき、各先生方の現実の姿を具体的かつ興味深く紹介していただいた。公立と私立の違い、また共学と別学の違いについても考えさせられる内容であり、教職を目指す学生にとって示唆に富むものであった。また、分科会に参加した現職教員にとっても職場ではなかなか聞くことのできないような若手教員の本音や悩みに触れることができる貴重な機会となったのではないだろうか。

そしてなにより、登壇した3名の若手教員にとっても普段の職場を離れて自らの教職生活について語るという経験が改めて自らの教職生活と向き合う機会となったことと願いたい。

以下、分科会の登壇者3名の方から分科会の感想や、分科会で伝えられなかった点などについて寄せていただいたものを掲載する。

（山下達也）

明治大学教育会分科会 報告書

佐久間 大氣（千葉明德中学・高等学校）

はじめに

私は2018年4月から千葉明德中学・高等学校で英語科の教員として勤務している。本校では数年前からICT教育を推進し、中学校・高校の全生徒がiPadを所有している。本分科会では、2年間を通じての自身の教科指導・校務分掌についてお話をさせていただきました。

1 教科について

近年、ICT教育は学びの質の転換（アクティブラーニングやアダプティブラーニング）

や学習の動機付けを目的として、私学を中心に注目を集めている。先日も本校では ICT 公開授業が行われ、他校の教員と ICT 教育について話す機会があった。そこで学生にも ICT 教育の一部を体験してもらいたいと考え、「Quizlet」という教育アプリケーションを紹介させていただいた。クイズは一問一答型なので社会や国語など英語以外の科目でも十分に使うことができる。学生は興味深そうに Quizlet の具体的な使用方法について、色々質問してくれて非常に嬉しく感じた。こういった教材の良いところは、生徒の個別学習(予習・復習含む)と協同学習を可能にしている点である。また勉強に対する苦手意識を持つ生徒にとっては非常に効果的なものであると考える。私は実際に担当クラスで Quizlet を実施しているが、生徒の授業を受ける姿勢や反応が今までとは異なる。

私は大学生の時から ICT 教育について興味を持っていたが、当然のことながら私自身はこういった教育を受けたことがないのは事実である。またアクティブラーニングについても知識は乏しい。そのため色々な研修に参加して自己研鑽をしていきたい。

2 校務分掌について

学生に教員として働くイメージを持ってもらえるように、実際の現場で働かないと知る事が出来ないような内容(時間割や授業時間数・担当科目数など)について話をした。現在私は教務部の専従教員として過ごしている。教務とはいわゆる学校の基盤となる裏方の仕事である。校務はいくつかの部署に分かれるが、その中でも特に教務部は年間を通じて忙しい仕事の一つである。主に全教員の時間割の作成や、各種予定表作成などであるが、業務内容を挙げたらキリがない。重要な仕事を任されたプレッシャーや生徒との関わりが最重要であると考えていたため、戸惑いを感じたが、上司に「若いうちに色々な部署で経験を積んだほうが良いと」肩を押され、日々業務に尽力している。日々の学校全体の動きが把握できるため、非常に私にとっていい経験である。

3 部活動について

私は昨年度バドミントン部(強化指定部活動)の副顧問、そして今年度は卓球部の主顧問をしている。学校の事情などで、必ずしも希望した部活動の顧問をすることができないのは事実である。強化指定部活動の顧問は初任だった私にとって大きな負担であった。正直辛いことのほうが多かったのは事実だが、その経験は主顧問になった時に非常にいい経験であった。まだクラス運営は経験したことはないが、部活動運営を通じて生徒との関わり方を学んでいる。今年度主顧問として部活動を通して生徒の「想像力」を養いたいと考える。そのためチームのためにできることや練習メニューを生徒主体で考えさせ、教員はファシリテーターとして指導に当たっている。

おわりに

本年度、初めてパネリストとして参加させていただいた。自分自身が話をして終わるだ

けではなく、他の教員や学校について知ることができて、非常に有意義な時間であった。しかしながら、伝えたいという思いが先行し、発表予定されていた時間をオーバーしてしまい、多くの方々にご迷惑をおかけしたことについてお詫び申し上げます。発表することの難しさを改めて痛感した。またいつかこのような機会があった時に、学生に経験として積み上げてきたものを一つでも還元できるように、日々精進していきたい。

最後にこのような貴重な機会に招いていただいた藤井先生、山下先生をはじめに、教育関係者のすべての方々に感謝申し上げます。

明治大学教育会分科会 報告書

窪田 貴和子（千葉県立船橋高等学校）

はじめに

今回のお話をいただいた時、たった半年の経験で何を語れば良いのか、教職課程を履修している学生の皆さんに有意義な情報を伝えることができるのか、悩ましく思った。しかし、大学を卒業してすぐに教壇に立ったからこそ気がついたことも多く、そのような私自身の純粋な発見をお話することで、「学校のリアル」を伝えることができればと思い、パネラーとして登壇させていただいた。この報告書では、分科会でお話させていただいた内容を少し深めて整理する。

1 勤務校の概要

私が勤務する千葉県立船橋高等学校は、進学指導重点校やサイエンスハイスクール（SSH）の指定を受けた、県下屈指の進学校である。進路指導やキャリア教育には大変力を入れており、大学の入試担当者を招いての大学説明会や、卒業生の協力による職業出前授業など、数多くの進路関係行事が実施されている。学習面でのサポートも手厚く、長期休業中はもちろん、放課後にも学習到達度別の補習をおこなっている。また、公立校としては珍しい例だと思うが、1年次と2年次は土曜日の午前中に隔週で授業を実施している。この土曜授業は、教科書レベルの基礎を前倒しで習得し、3年次には大学入試に向けた演習を授業の一環としておこなうための工夫で、すべてを保護者や地域に公開し、「開かれた学校づくり」の一環として位置付けられている。

このような懇切丁寧なサポートは生徒からも保護者からも非常に好評だが、私個人としては少々やりすぎなのではないかと感じる部分もある。ここまで丁寧に構築されたステップをただ言われた通りに登ることで合格を手に入れた子どもたちが、大学へ進学した後、自分が専門とする道を自分で選択し、自分の力で学問を極め、さらにその先の長い人生をどのように生きるのかを選択することができるのか、私は疑問に思う。また、教員の

働き方を考えると、土曜日に勤務した分の週休の振替が実際には困難であると言わざるを得ない状況の改善は急務である。

2 生徒から学ぶこと

進学校の生徒というと、教員のことなど相手にもせずに小馬鹿にしているイメージがあったが、実際に関わってみるとかなり違った印象を受けた。進学校には、当然のことながら、大変真面目で優秀な生徒が集まり、学校全体として落ち着いていて穏やかである。しかしながら、それは生徒の臆病さや他者への無関心からくるものでもあることに最近気がついた。そのような希薄な人間関係の中で、真剣に悩みを打ち明ける仲間巡りに巡り合うことができず、代わりに「信頼できる大人」を求めている。そのため、日々の授業やHRにおける教員の言動をととてもよく観察しており、生徒に誠実に向き合っている教員かどうかをすぐに見抜く。授業がどんなに下手でも、質問には真剣に対応し、知ったかぶりをせず、真に生徒の将来を思って関わっている教員のもとには生徒が集まってくる。だから、教員の「指導力」とは、単なる授業力でも統率力でもなく、「信頼される力」なのだと思う。これは生徒に教わった、教員として目指すべき姿だ。

学生時代には、真剣に教員を志して教職課程を履修し、多くのことを学んだ。それらは、実際に教員となってから本当に有益な知識として役立っている。しかし、教育も子どもたちも、時代とともに変化するものであり、その時に最も大切な視点は生徒が教えてくれるものなのだと思う。このことを強く胸に刻み、今後も多くのことを生徒との関わりの中から学び、教員として成長していきたいと思っている。

3 「学校」で教えるということ

教育に携わる仕事は、教員に限られたものではない。「教える」ということならば塾や予備校の講師でも良いし、「教育関係」であれば教科書をつくる出版社でも良い。では、教員として「学校」という場で教えることの意味は何か。学校教育の目的は何か。

学校という場所は、基本的にはすべての子どもが通い、一日の大半を過ごす場である。ある時間は勉強をし、ある時間は部活動等の課外活動に参加し、またある時期には文化祭等の学校行事を楽しむ。どんな時もある一定規模の集団に所属している。この特徴を見ると、学問を身につけるという目的に徹する場ではないことがよくわかる。これは当然のことなのだが、大学進学というゴールを目指し続ける進学校で毎日必死に授業をしていると、時々忘れてしまいそうになることでもある。

「学校」で教えるということは、生徒に将来の選択肢をひとつでも多く授けるということだ。「勉強ができるようになる」というのは、生徒がよりよく生きるための手段であって、最終的に辿り着くべき目的ではない。基本的なことだが、極めて重要な意識だと思う。

おわりに

教員となって半年、とにかくその日を無事に乗り切ることに精一杯で、自分が何を

きたのかを整理することすらできていなかったが、今回の登壇を機にこれまでの半年を振り返ることができた。このような機会をいただいたことに感謝申し上げ、結びとする。

大学生の「自分(きみ)」たちへ

高野 晃多 (佼成学園女子中学高等学校)

久しぶりに「熱い風」を感じる事ができた。大学時代の恩師の先生から母校の教育会分科会という栄えある場でお話する機会をいただき、非常に刺激のある一日になった。私が参加した第7分科会では、私を含めて3人の若手教員がそれぞれの経験に基づきお話をさせていだいた。私は、過去2年間の共学・男子校での非常勤経験と今年度の女子校での専任経験を比較しながら、以下のような内容でお話しさせていただいた。

まず初めに、女子校勤務の中で感じた「女子特有の強み」についてお話しさせていただいた。女子校の生徒は共学や男子校の生徒に比べ、自律した生徒が多いので何事にもく妥協しない>人が多いのが特徴だと考える。そのため、体育祭や文化祭などの行事には、個々人で温度差はあるものの比較的熱心に取り組む傾向があるように思う。だからこそ、ひとつ同じ方向に意識が向き、全員で努力するときのエネルギーは、他の校種の生徒より爆発的なものがあるということをお話した。また、生徒との人間関係構築プロセスが共学・男子校と女子校では大きく異なるということもお話しさせていただいた。

次に、現在私が主顧問を任されている吹奏楽部で、夏のコンクールを指揮者として生徒とともに戦った際の経験を中心にお話しさせていただいた。人生で初めて出場する吹奏楽コンクールが指揮者としての出場という異例の事態であったことや、病気で退職した前任者が強化指定部として育ててきたレベルの高い吹奏楽部ということもあり、生徒と関係を築けていない初心者顧問としての私の不甲斐なさ故に、本番3週間前を切っていたにも関わらず、生徒から指揮者を辞退してほしいと迫られた事件について話したところ、参加者の皆さんは非常に驚かれていた。このような異例尽くしの状態でコンクールを迎えた結果、金賞は獲得できたものの上位大会には進めない非常に残念な結果に終わってしまった。

しかし、部活動においてこうした困難な状況を経験したことで、私の中で非常勤時代とは全く性質の異なる「責任」というものを実感することができた。即ち、非常勤講師の「責任」とは、自分の好きな専門科目の授業に全力を注入し、好きな授業に関わる準備や生徒指導をする、いわば「好きなこと尽くし」のなかでの「責任」であった。しかし、専任教諭には、気が進まない仕事であっても全力で取り組み、場合によっては生徒に嫌われることも厭わずに、その使命を果たす「責任」があることを、身をもって痛感したことをお話した。

そして最後に、私自身が一番伝えたかった「これから教員を志す者に必要な意識」に

ついてお話しさせていただきました。即ち、一言に「学校で働く」と言っても「受験指導に比重をかける学校なのか、生徒指導に比重をかける学校なのか」など、その実態は多岐に渡ることは言うまでもない。また、昨今の就職事情は転職が一般的になってきているので、今後の教育現場でも様々なルーツを持った教員が「当たり前」になることが予想される。

このように、ひとりひとり異なる「強み」を持った教員が増えていく中で、自分がどのような教員なのかという「軸」を持つために、自分自身のキャリアプランニングをすることが、今後の教育業界で力強く歩んでいく際には必要不可欠だと実感している。私自身「レベルの高い専門科目の内容を教えられる環境で働きたい」と、教員を志すに当たって一番初めに考えたので、大学院進学を恩師のご助言のもと決め、その大学院卒という資格があったからこそ、今までの就職活動において大きなアドバンテージがあったと実感している。さらに、今後は課題研究教育の指導ができる教員のニーズが高まることは必至なので、そうした研究活動を今でも自分で継続してきたことが私自身の教員としての「強み」のひとつになっている。そのため、「自分がどのような教員になりたいのか」という明確なビジョンを大学生の早い時期から意識するだけでも意味があることだと考えたので、今回強調させていただきました。

以上のような三つの概説的内容の報告を行ったところ、学生からは好意的な声が多く聞かれた一方で、授業や生徒指導上の日常的工夫や実際の授業や生徒とのコミュニケーションにおける具体的エピソードをもっと話してほしかったという声も見受けられた。そのため、もし今後お話しさせていただく機会があれば、もっと具体的なエピソードから普遍的な学びへとつなげられるような話の組み立て方に改善すべきだと考えた。

このように、私にとっても非常に学びのある機会になり大変有意義な時間だったが、一番嬉しく感じたことは閉会後の懇親会でも積極的に質問してくる学生の存在だった。＜憧れに憧れる＞という言葉を私の報告の締めくくりに紹介したが、私とその憧れの対象になれるように今後もより一層努力を重ねていきたい。貴重な機会を下さり有り難うございました。